

第73回全国食肉衛生検査所協議会病理部会研修会に おける事例報告 (I)

太田 茉里[†] 日名 由紀子

全国食肉衛生検査所協議会病理部会事務局千葉県東総食肉衛生検査所
(〒289-2504 旭市ニ5908-3)

Proceedings of the 73rd Slide Conference held by the Pathology Group
of the National Meat Sanitary Inspection Office Council Part 1

Mari OHTA[†] and Yukiko HINA

*Chiba Prefectural Tousou Meat Sanitary Inspection Office,
5908-3 Ni, Asahi-city, 289-2504, Japan*

(2020年3月25日受付・2020年7月6日受理)

全国食肉衛生検査所協議会病理部会が主催する第73回病理研修会が2016年11月16日、17日に麻布大学で開催された。今回は24機関から再提出を含め、演題No. 2360, 2373, 2385~2389, 2391~2407の24題について討議され、No. 2379, 2380について追加報告があった。No. 2401, 2403については再検討となり結論が持ち越された。以下、これら24事例の概要を述べる。記載の診断名は提出標本の組織診断名であり、必要に応じ疾病診断名を括弧書きで併記した。

事例報告

1 豚の胸壁腫瘍 (演題 No. 2360)

[亀山弘貴 (青森県)]

症例: 豚 (雑種), 雌, 6カ月齢.

臨床的事項: 異常を認めなかった.

肉眼所見: 左胸壁の第6~13肋骨にかけて、手掌大の硬結感のある乳白色腫瘍を認めた。腫瘍は平滑で辺縁が樹枝状に広がり、胸壁に癒着していたが、壁側胸膜とともに剝離することができた。

組織所見: 腫瘍は異型性のない紡錘形細胞の高度な増殖と膠原線維の豊富な結合組織から構成されていた (図1)。腫瘍辺縁部では、束状に走行する膠原線維に沿って紡錘形細胞が分布していた。腫瘍中心部では、紡錘形細胞が束を成して交錯していたが、核分裂像はほとんど認められなかった。一部では血管新生、骨形成及びリンパ球集簇も認められた。免疫染色では、紡錘形細胞はビメンチン陽性、平滑筋アクチン一部陽性で、S-100蛋白、NSE、デスミンには陰性であった。

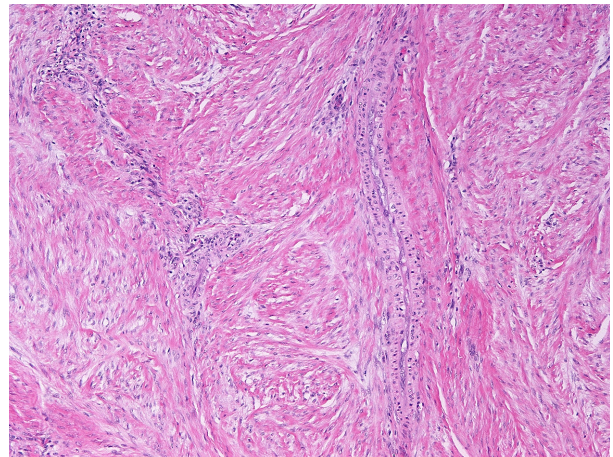


図1 豚の胸壁腫瘍

交錯する豊富な膠原線維の束と軽度のリンパ球の浸潤を認める (HE染色 原図×100)。

胞が束を成して交錯していたが、核分裂像はほとんど認められなかった。一部では血管新生、骨形成及びリンパ球集簇も認められた。免疫染色では、紡錘形細胞はビメンチン陽性、平滑筋アクチン一部陽性で、S-100蛋白、NSE、デスミンには陰性であった。

診断名: 豚の胸壁の線維芽細胞の増殖を主体とする疣贅性肉芽

[†] 連絡責任者: 太田茉里 (千葉県東総食肉衛生検査所)

〒289-2504 旭市ニ5908-3 ☎0479-62-2887 FAX 0479-62-2757

E-mail: tousyokken@mz.pref.chiba.lg.jp

[†] Correspondence to: Mari OHTA (Chiba Prefectural Tousou Meat Sanitary Inspection Office)

5908-3 Ni, Asahi-city, 289-2504, Japan

TEL 0479-62-2887 FAX 0479-62-2757 E-mail: tousyokken@mz.pref.chiba.lg.jp

討議：肉眼的には癒痕を形成しており，免疫染色性や他の部位を精査した結果，組織の修復過程で形成されたものと判断された．胸壁の激しい物理的損傷に続発した肉芽組織であると考えられる．

2 牛の大腿部及び肝臓の腫瘤（演題 No. 2373）

〔川田敬子（沖縄県）〕

症例：牛（黒毛和種），雌，10歳4カ月齢．

臨床的事項：右大腿部腫脹と起立困難がみられた．

肉眼所見：右骨盤腔内から大腿部の筋にかけて，硬結感を有する小児頭大の腫瘤塊を認めた．腫瘤は厚い被膜に覆われ，乳白色～赤褐色を呈し，左右内腸骨リンパ節は高度に腫大し同様の色調を示した．1～2cm大の白色結節が肝臓実質内に複数個，肺に1個，第四胃壁に2個認められ，腹壁腹膜には小豆大～米粒大の白色結節が局所的に密発していた．

組織所見：腫瘤及び白色結節はすべて，密に増殖する弱好酸性で紡錘形～多形の腫瘍細胞と少量の膠原線維から成り，腫瘍細胞は束状ないし不規則に増殖し周囲組織に浸潤していた（図2）．一部で粘液様の基質がみられた．核は淡明な類円形～短紡錘形で明瞭な核小体を有し，核分裂像が散見された．腫瘍細胞は一部がアザン染色で赤染し，PTAH染色で青藍色を呈した．さらに，腫瘍細胞が1～数個ごとに膠原線維ないし好銀線維に取り囲まれる像がみられた．免疫染色では腫瘍細胞はビメンチン及び平滑筋アクチンに陽性，デスミン一部陽性，一方サイトケラチン，S-100蛋白，第8因子，平滑筋ミオシン（SMMS-1），カルデスモンに陰性を示した．

診断名：牛の大腿部及び肝臓の筋線維芽細胞肉腫（牛の筋線維芽細胞肉腫）

討議：組織学的には平滑筋肉腫と酷似していたが，平

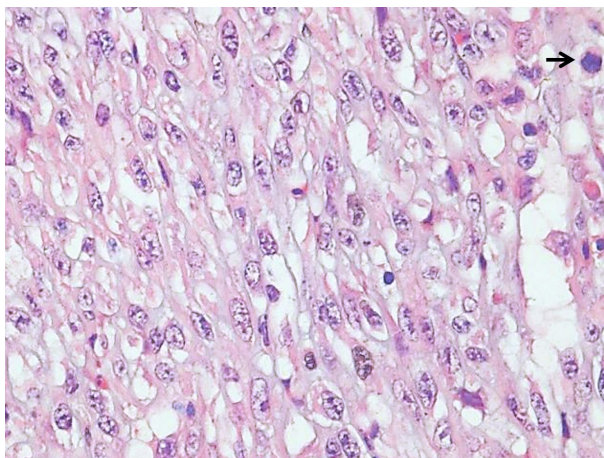


図2 牛の骨盤腔内腫瘤

紡錘形腫瘍細胞は密に増殖し，核は淡明，類円形～短紡錘形で核小体明瞭．核分裂像（矢印）もみられる（HE染色 原図×400）．

滑筋ミオシン及びカルデスモン陰性の免疫染色結果から，平滑筋肉腫は否定された．動物のWHO腫瘍分類に筋線維芽細胞腫瘍は含まれていないが，人での組織学的特徴と本症例はおおむね一致する．骨盤腔部原発腫瘍が他臓器に転移したものと考えられた．

3 牛の子宮の腫瘤（演題 No. 2379）

〔齊藤浩二（郡山市）〕

症例：牛（黒毛和種），雌，161カ月齢．

臨床的事項：異常はみられなかった．

肉眼所見：左右子宮角分岐部に径26cm大の弾力のある球状腫瘤が認められた．腫瘤は子宮漿膜との境界は明瞭で，断面は充実した乳白色で光沢を有した．出血や壊死は認められなかった．その他には肝臓で富脈斑，心臓で心外膜炎が認められた．

組織所見：腫瘤は紡錘形腫瘍細胞の錯綜配列から成り，漿膜下から筋層にかけて増殖していた．筋層との境界は明瞭であった．細胞間にはさまざまな量の膠原線維が認められた．腫瘍細胞の多くは複数の核小体を含む葉巻状淡明核と好酸性細胞質から成り，異型性は目立たなかった（図3）．鍍銀染色では腫瘍細胞の箱入り像が認められた．免疫染色では腫瘍細胞は平滑筋アクチンとデスミンに陽性を示した．

診断名：牛の子宮平滑筋腫

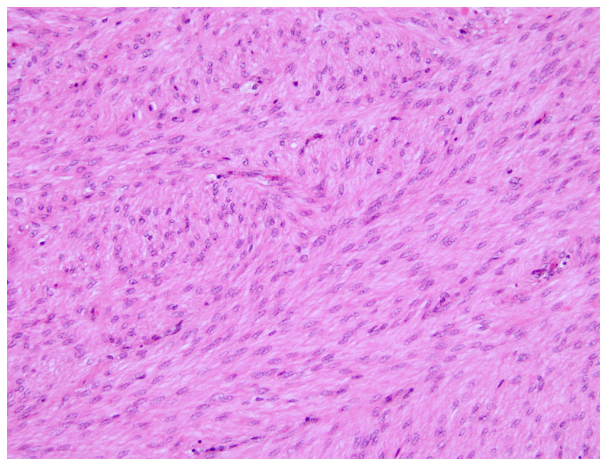


図3 牛の子宮腫瘤

腫瘤は錯綜配列を示す紡錘形腫瘍細胞で構成される．腫瘍細胞の多くは異型性の乏しい葉巻状淡明核と好酸性細胞質を有する（HE染色 原図×200）．

4 牛の子宮の腫瘍 (演題 No. 2380)

[小野正浩 (仙台市)]

症例: 牛 (ホルスタイン種), 雌, 10歳2カ月齢.

臨床的事項: 異常はみられなかった.

肉眼所見: 両側肺実質内に径2~3cmの灰白色, 硬結性腫瘍が散見され, 同時に縦隔リンパ節及び内腸骨リンパ節の硬化, 腫大が認められた. また左子宮角の外膜下に扁平な小指頭大硬結部が2カ所触知され, 同部剖面では, 内膜下から筋層にかけて白色肥厚部がみられた. その他の臓器では著変はみられなかった.

組織所見: 左子宮角, 肺実質, 縦隔リンパ節及び内腸骨リンパ節では, 膠原線維に富む間質とリンパ球, 形質細胞の浸潤を伴う多形性の強い腫瘍細胞の単在ないし集簇が随所に認められた. 特に子宮では一部内膜上皮が腫瘍細胞へ移行する像が観察された. 腫瘍細胞の形態は小型単核細胞から大型多核巨細胞まできわめて多形で, 細胞質はさまざまな程度にエオジン好性を示し, 時折PAS反応陽性物質や大型空胞を含んでいた(図4). また, 腫瘍細胞の集簇部ではまれに腺腔様構造が形成されていた. 免疫染色では, 腫瘍細胞はサイトケラチンAE1/AE3及びサイトケラチン7に陽性, ビメンチン及び平滑筋アクチンに陰性であった.

診断名: 牛の低分化型子宮腺癌

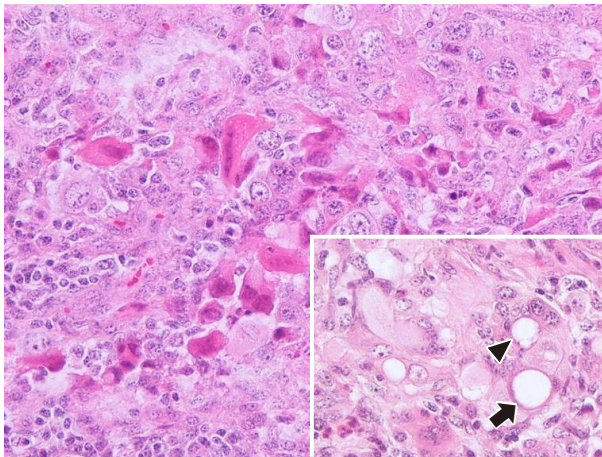


図4 牛の子宮腫瘍

腫瘍細胞の形態はきわめて多形で, 核異型を頻繁に認める.

挿入図: 腫瘍細胞に囲繞された腺腔様構造(矢頭)と大型空胞(矢印)(HE染色 原図×240).

5 鶏の腎臓 (演題 No. 2385)

[新井靖人 (福島県)]

症例: 鶏 (肉用鶏交雑種), 雌, 69日齢.

臨床的事項: 発育不良が認められた.

肉眼所見: 左腎(前葉・中葉・後葉)に大小不同の白色腫瘍が多発し, ほぼ全域が腫瘍に置き換えられていた. 腫瘍内部には乾酪様物質が充満していた. 左腎後葉に形成された最大腫瘍の剖面では拡張した管腔様構造が認められた. 左腎の既存組織は腫瘍の外側, 被膜直下に一部残存していた. 右腎及び他臓器に著変は認められなかった.

組織所見: 腫瘍は多発した大小さまざまな肉芽腫から成っていた. 乾酪様物質は多数のグラム陰性桿菌を含む壊死退廃物で, その周囲をマクロファージ, 多核巨細胞, 線維芽細胞が取り囲み, さらにその外側は結合組織が増生していた(図5). 最大腫瘍内の管腔は移行上皮で内張され, その周囲に平滑筋層がみられたことから, 最大腫瘍は尿管壁に発達した肉芽腫であった. 被膜直下に残存する腎組織では糸球体及び尿管が変性し, 間質に偽好酸球, リンパ球の浸潤と一部の尿管内に少数の偽好酸球がみられた.

診断名: 鶏の腎の多発性化膿性肉芽腫性炎

討議: 病変が左腎に限局したのは, 総排泄腔に開口する左側尿管から細菌が上行感染したものと推察された. 細菌の分離・同定は実施されなかった.

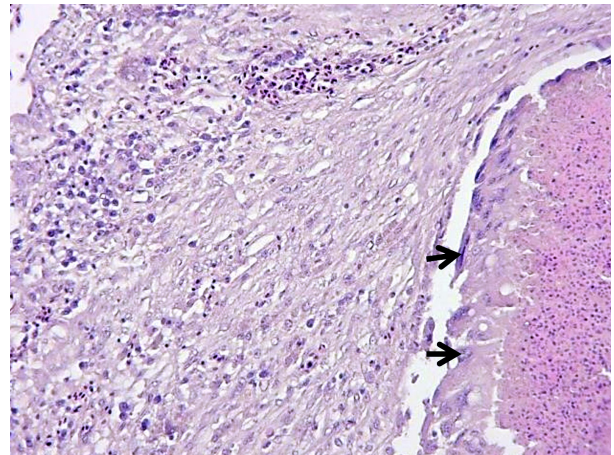


図5 鶏の腎臓腫瘍

壊死退廃物(右)を取り囲む多核巨細胞(矢印)及びその周囲の結合組織と炎症細胞浸潤(HE染色 原図×100).

(次号へつづく)